

ふぞろいの林檎たち^{リンゴ}
山田太一



新潮文

リンゴ
ふぞろいの林檎たち

新潮文庫

や-28-4



平成二年十一月十五日
平成二年十一月二十五日
発行刷

著者
山田太一
やま だ た いち

発行者
佐藤亮一
さとう しょういち

発行所
株式会社 新潮社
株 式 会 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四一八〇八番

価格はカバーに表示しております。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Taichi Yamada 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-101814-6 C0193

江苏工业学院图书馆

ふろいの林檎たち
蔵書章

山田太一著

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

1	学校どこですか？	七
2	恋人がいますか？	六
3	生き生きしていますか？	三
4	なにを求めていますか？	一五
5	親友は誰ですか？	四
6	キスしてますか？	九
7	どんな夢見ていますか？	三七
8	大きな声が出せますか？	四二

9	ひとの心が見えますか？	四三
10	胸をはっていますか？	五五
	あとがき	五八

解説 柴門ふみ

ふぞろいの林檎^{リンゴ}たち

●スタッフ

プロデューサー 大山勝美

演出 片島謙二

鴨下信一

井下靖央

●キャスト

仲手川良雄 中井貴一

岩田健一 時任三郎

西寺実 柳沢慎吾

水野陽子 手塚理美

宮本晴江 石原真理子

谷本綾子 中島唱子

本田修一 国廣富之

伊吹夏恵 高橋ひとみ

仲手川耕一 小林薫

仲手川幸子 根岸季衣

仲手川愛子 佐々木すみ江

西寺泰治 石井均

西寺知子 吉行和子

岩田邦行 北村和夫

岩田喜代 荒木道子

土屋部長 中野誠也

橋本社長 河原崎次郎

島脇邦子 千野弘美

佐竹順治 水上功治

その仲間A 谷村好一

その仲間B 布施博

一九八三年五月二七日～七月二九日
TBSテレビにて放映(10回連続)

1 学校どこですか？

●六本木・路上（夜）

餅もちを焼いている屋台店。

その前でごく平凡な女の子二人が餅を食べている。

ややはなれて仲手川良雄も餅を食べている。

女の子たち、良雄を意識している。

良雄もなんとか声をかけたいと思いながらチラと女の子の方を見たりする。

女の子たち、なにかささやき合ってククツと笑ったりする。

●メイン・タイトル

●六本木・路上

良雄、餅を食べている。

女の子たちは、もういない。
良雄、餅を食べている。

●六本木・交差点周辺

美しい娘、そうでもない娘、白人の女。無論男どももいる。楽しげに大笑いをしている男女のグループなどもありたりする。
その中を良雄、歩く。

立ち止って、ウインドウを見たりもする。

それらを背景に、クレジット・タイトル。

良雄、ドキリとする。傍を通る数人の男たちが、良雄と同じベストを着ているのだ。
タクシーから降りる数人の男も、同じベスト。

そして、あるディスコの前に、同じベストの男たちが、娘たちと笑ったりしている。

たとえばサミー・デイビス・ジュニアが、口ならしをしているような「ウワオ、ウワ、ウワオ」というマイクを通した声が聞え、

●ディスコ

司会の学生「（マイクをつかんで）ウワオー（と店内の注意をひきつけ、うってかわってさわやかに）今夜はようこそ私達のパーティーにおいて下さいました（これも一種のさわやか芝居で、それをひやかし気味に反応する学生たちの声がある）スポーツ同好会、ブービーコスモスは、

東京大学医学部、慶応大学医学部、東京医科歯科大学のブービー共の、きわめて——きわめて自閉的な（軽くはずして）集りなンよ（男共の声あり）俺たちは気にしないようにしている、将来間違つて悪くもない足を切り落してしまうことはないか？ ノルマルなクランケだなんて言い出さないか（わざと集った女性を小さく疎外する専門用語をチラつかせ）ウワオー（景気よく）行ってみよう（以下、ベストヒットUSA風に盛り上げて行く）」

その学生たちの隅に、良雄立っている。
忽ち、デイスコ・サウンズ、大きくなって。

●店内（時間経過）

踊る男女学生たち。

その中に、伊吹夏恵がいる。それを隅で見ている良雄。

●店内（時間経過）

曲が変っている。

隅に現われる三人の学生、目立たぬように踊りの中を見る。

夏恵が踊っている。夏恵が微笑する。その相手は良雄である。良雄、踊っている。学生三人が、さり気なくその良雄に近づき、なにかいう。

良雄、青ざめて、うなずく。

三人と一緒に出口の方へ行く良雄。

●表への階段

良雄、三人に追われるように上って来て振りかえり、

良雄「悪かったけど、計画的じゃないんだよ」

学生A「いいんだよ（なだめるように）」

良雄「偶然、あんたらと同じベストだったんで」

学生A「分ってる（と良雄を上にあげようとしながら）ただ、内輪の集りなものでね、遠慮して貰うだけ」

良雄「ああ」

学生B「失礼だけど学校どこ？」

学生A「聞くなよ、そんなこと」

良雄「フフ、悪いね（と逃げるように外へ）フフフ」

●六本木の道

良雄、どんどん歩く。

学生Bの声「失礼だけど、学校どこ？」

学生Aの声「聞くなよ、そんなこと」

良雄、どんどん歩く。

良雄の声「（独り言で小さく）どうせね、手前らみたいな」

●地下鉄の電車の中

良雄「いい学校じゃねえよ（と目の前のドアのガラスを掌^{てのひら}で叩^{たた}く。ハツとする。独り言をいってしまつたのを、とりつくろうように）えーと（などという。みじめである）」
別に反応しない乗客たち。

●岩田健一のアパート・部屋

コップに焼酎^{しょうちゅう}を注^つぎ、薬缶^{やかん}の湯で割りながら、

健一「東大と慶応？」

良雄「（ベストなしで、腰おろしている）東京医科歯科と」

健一「なんだ、そりゃあ」

良雄「だから、合同の、スポーツ愛好会だよ」

健一「で？」

良雄「男ひとりに女が三、四人て感じよ」

健一「ケツ」

良雄「もてんだよなあ、ああいうところは」

健一「聞きたくねえな」

良雄「――」

健一「なんで医者がいいんだ、バカヤロ」

良雄「仕様がねえよ」

健一「バイトか？」

良雄「うん？」

健一「そのデイスコでバイトかよ？」

良雄「そうじゃねえよ」

健一「じゃあ、なんだ？　なんで、そんなパーティー見たんだ？」

良雄「——」

健一「うん？」

良雄「——」

健一「はつきりしろ、お前は」

良雄「六本木行って——」

健一「うん」

良雄「（シャツの腹のあたりにつつこんであつたベストをとり出して、健一へほうり）やるよ」

健一「なんだ、これ」

良雄「——」

健一「フィラじゃねえか。なんだ、こんな高^{たけ}えもの」

良雄「買ったさ」

健一「で？」

良雄「やるよ」

健一「なんで？」

良雄「――」

健一「なにがあった？ なにあったよ？」

●国際工業大学キャンパス（昼）

西寺実が、独特の歩き方で「ウパウパウウウ」などと小さくロックをくちずさみながら歩いて行く。

●校舎の階段

実、のぼって行く。

●ある教室

実「（入って来て尚^{なお}）ウツパパパ（などと通路を歩く）」

健一と良雄がいて、

健一「やめとけ、もう」

実「（簡単にやめて、ポケットからクチャクチャのビラを一枚出し、見て）これ立教（別のポケットをさぐって）これが、早稲田^{わせだ}と上智^{じょうち}（と二枚のビラを机の上にほうる）」

健一「（もう立教のビラを見ていて）ウインブルドンだと、よくまあつけるよなあ（と別のビラをとる）」

良雄「(はなれて一点を見ている)」

実「これでよ、このビラで何人集ると思う？」

健一「早稲田のスポーツガイと一緒に汗をかこう(うんざりして)ワイセツなことをまあ」

実「そんなこといったって駄目なのよ」

健一「なにが？」

実「いくらビラがダサくたってよ。これお前女子大へ行ってくばるだろ。来るんだよ、早稲田とか上智とかいうだけで、女子大の女どもが、百人二百人と集ってくる。スポーツアンドレジャークラブなんて、いい加減なことだって、入会金二千円がとことって、女の子えらび放題だつていうんだから、そんな癪な話があつか(と机をたたく)」

健一「こつちも、やろうってえんだ(と教科書と一緒にほうってあるレポート用紙をとりに行く)」

実「来るか？ 国際工業大学で、女が来るかよ」

健一「やってみんだよ(とボールペンを出してレポート用紙をひらく)」

実「高校入ったとき、お前は普通校は駄目商業校も駄目その偏差値じゃ工業高校しかないよ」なんていわれてよ。定員割れの工業高校から、定員割れの国際工業大学へ入ってよ」

良雄「――」

実「学校何処ですか？ って聞かれるのが一番嫌で、やっと国際工業大学ですつていうと、みんなハツとして、それから慌てて本心かくして、工業大学は就職率いいでしょうなんてよ。いいもんか、畜生」

健一「（達者にレポート用紙にビラを参考にしながら募集のコピーを書いている）」

実「アホの代表みたいに思われるんだぞ。そんな学校へ、女子大の女が集ってくるかよ？
え？ 何処の大学でもおいでおいでっていつてんのに、わざわざ最低のオレっちの大学へ来る女がいるかよ？」

健一「お前は最低か？」

実「え？」

健一「お前は最低の野郎か？」

実「そんなお前」

健一「自分でそういつたろ？」

実「俺はこの学校が最低っていったんで」

健一「ちゃんと見える女だっているんだ。東大だつてくさつたみてエな男もいりやあ、こういうところにも俺みてエない男がいるってな」

実「へへへ」

健一「あいつ（良雄）はどうだ？ あいつは、早稲田のイモよりずっと格好いいだろうが」

実「そんなこといやあ俺だつて」

健一「そうだよ。お前だつて、見かけは悪いけど、気持はちよつとしたもんだ」

実「ウー（となにかいいたいが）」

健一「来るって。学校なんか目くらまねえ女が、ちゃんと来るって」

実「うん」